

公益社団法人日本都市計画学会北海道支部(田村亨支部長)は、2017年2月28日、「旭川市中心市街地におけるイベントと地域活性化」と題する都市地域セミナーを開催しました。食をテーマに中心市街地のにぎわいづくりに取り組む“食べマルシェ”と女性だけのランイベント“スイートガールラン”について、旭川市経済観光部の住吉俊彦さんとスイートガールラン実行委員会の前田博さんからの話題提供を受け、セミナーの参加者と意見交換。その一部を紹介します。

クローズアップ

公益社団法人日本都市計画学会北海道支部 平成28年度第2回都市地域セミナー 旭川市中心市街地におけるイベントと地域活性化

公益社団法人日本都市計画学会北海道支部 鈴木 栄基

「食べマルシェ」と北・北海道のにぎわいづくり



住吉 俊彦 氏
旭川市経済観光部経済交流課

開村120年、市制88年に当たる2010年10月、食をテーマにしたイベント「食べマルシェ」を開催。駅前の買物公園から常磐公園まで、1.7kmの会場に屋台が連なり、来場者は100万人を超え、出店者は220から230店舗で推移しています。駅構内で開催する駅マルシェと合わせる

と、参加店の総数は320から330店舗となります。2千円に百円のプレミアム券をつけたお楽しみチケットは、ローソンとも提携して販売、まちなかの活性化に取り組んでいます。

企業の協賛を得て、新しい料理、スイーツなども食べマルシェに合わせて発表し、煙を発生する焼き鳥などは、常磐公園内に集めました。小さなお子さん向けの遊べる場「キッズマルシェ」も用意、駅前から常磐公園までは無料バスを運行するなど利用者が参加しやすい工夫をしています。

テントでの出店に当たっては、既存店の協力、理解が必要であり、毎年、街区ごとに店舗と休憩所とを交互に入れ替えて配置するなど配慮しています。

女性だけのランイベント「スイートガールラン」



前田 博 氏
スイートガールラン実行委員会

スイートガールランは、ランニングで女性をきらきらさせる、をコンセプトに、食べマルシェの関連イベントとして2011年から開催しています。きっかけは、東京や名古屋の取り組みに触発され、食べマルシェというイベントに来る人との相乗効果をねらったことです。走るだけ

だけでなく、スイーツ、フード、マッサージ、コスメがまとめて楽しめるイベントで、昨年は、フェイスペインティングを取り入れるなど、順位を競うよりも、ランニングを楽しんでいます。

郊外型マラソンが、2007年から始まった東京マラソンを契機に、声援を受けながら駆け抜ける都市型のイベントに変わり、豊富なウエア、シューズ、教室開催など、ビジネス化も進んでいます。

札幌ではなく、地元で役立ちたい思いで始め、開催日以外にも、ランニングに関するセミナー、思い思いのファッションで、ランウェイを歩く楽しみなど、走らないイベントも開催しています。Tシャツなどのオフィシャルグッズも売れ、そのTシャツで走ってくれる参加者が多く、参加費(エントリーフィー)と合わ

せて運営収入になっています。

しかし、会場の北彩都（旭川市の地区計画による新たな都心地区）は造成地の処分が進み、駐車場などに利用できるスペースがなくなってきました。また、開催当初から公道の使用希望を公安委員会に相談し、4年目からは開催日を食べマルシェとずらしましたが、警備体制などの理由から希望はかなっていません。

参加者は市内と市外が半々、コアスタッフも女性中心で、まちに華やかさを添えています。市長選の公約に、女性のランニングが盛り込まれていたこともあり、行政手続き上は市の協力が得られています。女性だけのマラソン大会は、今後も広げられる力をもっています。いろいろな方とコミュニケーションをとって、大きく広げる道を探していきたいと考えています。

既存店との関係ならびに経済効果

小松正明（学会副支部長） 食べマルシェは既存店との関わり、スイートガールランは企業協賛、参加者の年齢層や興味の持ち方を、どうとらえていますか。

住吉 出店に係る消防面などの安全確保のほか、路面店との連携・協力を図るため、テントの配置を工夫し、既存の飲食店とは相乗効果が出ています。

期間中、市内のホテルは満室ですが、市外客は4割程度にとどまっています。期間が3日間と短いため、道内の他のイベントとつながりを持たせることなどが大事です。市の予算は5千万円で、職員その他の応援もあり、経済波及効果は、産業連関表で30～40億円程度です。3次効果を含めて、路面店との更なる連携が課題です。

企業と30代女性に支えられるイベント

前田 ランニングイベントの収支の成立規模は、参加者が3～5千人。現在の参加者が350人前後、収入130万円なので、必要な計測費を縮減しても、収支が厳しい。そのほかは、地元を含め企業協賛により実施しています。特に地元企業から資金協力があり、行政から

の補助金は受けていません。参加者のうち、初参加が3分の1くらいを占め、30代が多く、子ども連れファミリーも増えてきました。

道路インフラがもたらす価値

会場 2005年に北海道開発局は、買物公園で飲食物を提供する休憩所を道路占用の特例で認める社会実験を通して地域振興の事例をつくりたいと臨みましたが、継続は厳しかった。道路インフラは、地域が幸せになるための社会的な富であり、食べマルシェやランニングのような使い方は、みんなが豊かになり、本来の目的にかなっていません。東京マラソンも最初は反対意見もありましたが、結局、道路インフラが生み出す価値として、年に1～2日なら、多少の不便があってもいいと考えられるようになりました。

住吉 中心市街地のにぎわいづくりでは、道路インフラとイベントなどのソフトをどうリンクさせるかが大事です。

行政に認められるイベントに

会場 行政主導の食べマルシェと好対照なスイートガールランが、今後、継続、拡大していくには。

前田 女性だけのランニングイベントは、潜在的な力があるので広く展開していきたいですが、開催できる場所が狭まるなど難しい面もあります。市に認められる特色あるイベントに育っていけばと期待しています。

小松 社会インフラの使い方をもっと上手に、規制も緩和すればとの指摘がありました。札幌の赤れんがテラスは、道路を広場に変えてイベント空間らしくするなど、現場の工夫も見えています。人口減少が進み地域が疲弊していく中で、今あるインフラやストックを生かして、もっと富を生み出す方法を地域でも真剣に考えるいいヒントになりました。

本日はどうもありがとうございました。